

異文化共存問題と文学的読み方

～『ホワイト・テース』を話のタネとして

宮原 一成 (本学部教授)

小説を題材に異文化交流や異文化衝突を考える。その際、一般的かつストレートな方法論とは、おそらく還元的なアプローチであろうと思われる。すなわち、登場人物たちをある集団の代表者として捉え、かれらが織りなす人間ドラマをまずあらすじへと凝縮する。それを現実社会の提喻的な写し絵と見なし、小説の社会背景にも目配りしながら、小説を一つの史料に還元して読むのである。

文学が特権的な文章表現ジャンルではなく、価値の上で各種のテキストとの間になんら優劣の差はない、とする考え方は、文学研究の分野においてもすでに定着して久しい。そんな中であくまで「文学的読み」にこだわり続けるのは、野暮な時代遅れと見なされたり、学際化の潮流に反する頑迷固陋なセクト主義の誹りを受けたりしてもしかたがないのが現状だ。既存の文学研究領域という枠など取り壊し、あらゆるテキストを等し並みに扱うアプローチを追求したほうがいい、というのが大方の趨勢である。

だがそれでも、ときには作家の文体選択や文章構成といった、まさに文芸の本領とする言葉の彩^{あや}に注意を払うことも、もっと奨励されていい。それは、〈他文化〉に対する敬意の形でもある。作家とは、言葉の彩による創作という方法で自文化を表現しよう^{あや}と決意した者のことだ。その作家という〈他文化〉に読者が対峙するとき、相手の表現媒体を充分に受容する構えを持つこと。これは相手に対する敬意の、もっとも基本的な形の一つではないだろうか。本稿では、20世紀末の西暦2000年にゼイディー・スミス (Zadie Smith) が発表した愉快な長編小説『ホワイト・テース』(White Teeth) を例にとり、ささやかな実践を試みてみたい。

作者のスミスは自伝的小説ではないと言うが、それでも彼女の出自とその出自が育んだ問題意識は作品の中に顕著だ。スミスは、イングランド出身の白人を父に、ジャマイカ生まれの黒人を母に持つ、出版当時24歳の女性で、その人種的な背景は小説の主要人物の一人アイリー・ジョーンズにそのまま引き継がれている。小説自体も、スミスが生まれ育ったロンドン西北部ブレント地区のウィルズデンを主な舞台として展開している。

20世紀最後の四半世紀におけるこの界限は、(この小説においても、また現実においても) まさに多民族・多文化社会である。実際、小説の主要な登場人物の中で、生粋のイングランド人と言えるのはアイリーの父アーチャー・ジョーンズくらいなもので、母クララはジャマイカからの移民二世で、エホバの証人の教義をたたき込まれて育った女性だし、ジョーンズ一家と家族ぐるみのつきあいをしているイクバル家はバングラデシュ(当時はベンガル)からの移民で、ムスリムである。アイリーが学校で喫煙者摘発にあったとき、処罰代わりに教養あるチャルフェン家と交際することを校長から命じられるが、そのチャルフェンも、「英国人よりも英国人らしく」生きることをモットーとしているものの、実は第二次大戦期にイギリスへ避難してきたユダヤ人で、けれども宗教はカトリックという複雑な来歴を持つ。チャルフェン家の家長マーカスは遺伝子工学の第一人者というインテリだが、彼が師と仰ぐフランス人

マルク・ピエール=ペレは、優生学者として戦時中ナチスに協力、ユダヤ人抹殺計画に寄与しており、この師弟関係は奇妙なねじれをかかえているはずなのだが、二人ともこの点についてはまったく無邪気である。

文化的背景や宗教面でのねじれが顕在化するの、イクバル一家においてである。一家の長サマード・イクバルは、現在自分たちが暮らすロンドンでは、純粋なムスリムらしい生活を送ることはできないと絶望し、双子の息子の片方をバングラデシュにやってそこで敬虔なムスリムとして成長させようとする。たしかにその心配はあたっていて、息子の一人ミラトなどは、西洋文化にどっぷり浸かってしまう。家を押しつぶすほどの大嵐が襲ったとき、自主避難するために必要最小限の携行品をまとめろ、と指示された12歳のミラトが持ち出したのは、ブルース・スプリングスティーンのレコードと、ロバート・デ・ニーロ出演の『タクシー・ドライバー』のポスター、プリンスの『パープル・レイン』のビデオ、リーバイスの501ジーンズ、コンバースの黒いバスケット・シューズ、そして『時計仕掛けのオレンジ』一冊、という有り様だった。一方、サマードの期待を一身に背負ってバングラデシュに送り込まれたマジド・イクバルは、そこでなんと西洋文明の魅力に取り憑かれ、西洋知識人の仲間入りをすべくマーカス・チャルフェンに文通の形で私淑するようになる。ロンドンに残ったミラトは、西洋のポップ・カルチャーに未練を残しつつも、イスラーム原理主義過激派集団に加入し、過激な破壊行動に走る非行少年となる。

ここまで小説の一部分を、わざとあらすじの形で紹介してみた。これを見ただけでも、前世紀末におけるロンドンの異文化混交状態が、多分に戯画的な形ではあるものの、かなりよく描き込まれた作品であることはおわかりいただけると思う。また、ミラトの持ち出し品リストなどは、1987年ロンドンの文化的状況に関する一種の示相化石のような史料価値もあるだろう。さらには作者スミスが多民族的出自の興味深さも相まって、異文化交流や衝突の問題に関心のある人たちが、こぞってこの小説に注目し、登場人物設定やプロットのあらましを議論のための資料や史料として利用したくなるのもむべなるかな、と思われる。

だがここで、小説の文章自体に目を向けてみよう。取りあげてみたいのは、小説第17章末尾にある場面で、1992年11月、アイリーやマジド、ミラトが17歳の頃のことという設定である。マーカス・チャルフェンの誘いでイギリスに帰国したマジドは、物腰のすべてがイギリス中産階級ふうで、家族とは当然折り合いが悪い。特に、イスラーム原理主義に専心したがついているミラトは非常に険悪な態度を示し、顔を合わせようとしめない。二人を和解させることを頼まれた幼なじみのアイリーは、どうせうまくいきはしないと思いつつも、近くの学校の空き教室で二人を対面させる手はずを整える。対面の結果はアイリーの予想どおりで、二人は各自の主張をそれぞれに力説するだけに終始し、何ら歩み寄りがないまま物別れに終わる。

ここで小説の語り手は唐突に〈ゼノンのパラドックス〉という比喻を持ち出す。空間を無限に分割できるものと前提することにより、俊足のアキレスは先行する亀に永遠に追いつけないのだ、宙を飛ぶ矢は静止したまま先へ進むことがないのだと結論する、例の有名な逆説である。マジドとミラトの議論には進展がなかった、と述べた後で、この小説の饒舌な語り手は、二人がもとの立脚点から一歩も進まなかったことを、ゼノンの矢に喩える。「兄弟二人は、時間上の瞬間に囚われの身であった」「二人は停止したまま走っている」と、語り手は哲学めかして言う。その上で、語り手はゼノンがあのパラドックスを持ち出したそもそもの動機について、次のように段階を追って洞察する——「(a) まず、多様性や〈多〉という概念を、幻想にすぎないものと定義し、そして (b) 現実とは継ぎ目のない滑らかな一つの

全体であること、唯一で分割しようがない〈一〉であることを証明すること」。多様性や、果てしない分割を認めてしまったら、全体はその場に停滞するばかりで、進歩することができない。〈一〉という全体としての進歩を目指すために、〈多〉を犠牲にして無視する。そういう一種の悪意が、ゼノンのパラドックスの裏にあるのだ、と語り手は指摘してみせる。

その直後に語り手は、段落を改めて、次のような反論を展開する——「しかし、多様性は幻想などではない。[多民族社会の] 垣塙るっぼの中で沸々と今煮られている者たちが多様性を目指して突進している、そのスピードもまた、幻想などではない。パラドックスは抜きにして、かれらは走っているのだ。アキレスも走っていたのと同様に。多様を目指してひた走る者たちは、それを否定する者たちにいつかは確実に追いつき、追い抜く。それは、アキレスがついには亀を一敗地にまみれさせるのと同じくらい確実なこと。そう、ゼノンにはよこしまな企みがあったのだ。ゼノンは〈一〉を欲していたのである、しかし、この世界は〈多〉なのだ」。垣塙型の同化政策は、民族や文化の差異をなくして均質な社会をつくろうとする。それに抗って民族固有の文化を死守する姿勢を、語り手はここでいったん称揚してみせる。

だが、語り手はさらにその後に、今述べたばかりの議論に対してみずから異を唱える——「しかしそれでも、あのパラドックスには思わず心をそそられるところがある。アキレスが必死に亀に追いつこうとすればするほど、先を行く亀は自分との距離をいっそう声高に主張する、というイメージである。それと同じように、双子たちも、未来に向かって突き進んでみても、結局は、ついさっきまで自分たちがいた場所、自分たちの過去をいっそう声高に披露するはめになるのだろう。なぜなら、移民（亡命者、移住者、旅行者）に関しては、もう一つ考えなければならない重要な事項があって、それは、かれらが歴史から逃げ切るといえるのは、あなたが自分の影を捨てるのと同じくらい、不可能だということなのだから」。

ここで語り手は、同じゼノンのパラドックスを用いつつも、まったく違った扱い方をしている。その結果、ある種の〈一〉には鮮やかに勝利を収めた〈多〉が、別の〈一〉には歯が立たない、という悲観に行き着いている。イスラームの伝統を何一つ変えることなく堅持する生き方を第一義とし、「移民二世の世代なんて話は聞きたくない！ 一つの世代しかない！ 分かつことなどできない一つの世代があるのみ！ 永遠に！」と吠える移民一世のサマードを、〈一〉のイメージで見るとすれば、移民二世たちは多様に変容しつつ、一世や母国民たちを抜き去って、いつかは置き去りにしようといひた走っている。だがそれは不可能な試みであって、綿々と続く民族の歴史は大きな〈一〉として、個々人が多様な生き方を目指すことに干渉する。そう語り手は述べているのである。

異文化共存の問題を考えるうえで、二説ともそれぞれに示唆的な議論ではある。だが、その二説の吟味や、どちらに軍配を上げるのかという態度決定を突き詰めるよりも、ここではまずその書かれ方のほうに注意を向けてみたい。

このゼノンのパラドックスを扱う文章は、今見たように、めまぐるしく議論が二転三転する形で書き進められている。ゼノンのパラドックスを持ち出しながら、そのパラドックスについて十分に紹介をする前に、いきなり本題に入っている。そうして少しばかり時空間論をぶったかと思うと、「飛ぶ矢のパラドックス」の利用がしっかり終わらないうちに、別のパラドックス「アキレスと亀」を、これまた前置きもなしに導入、話題は時空間論からいつのまにか多民族社会論に移っている。

こういった性急で一見恣意的な展開のせいで、一つの話目を扱っているはずなのに、“But”——“But”——“And yet still” と、逆接語句が立て続けに三度も出現することになった。しかも、「しかし、多様性は幻想などではない」に始まる論述と、「しかしそれでも、あのパラドックスには思わず心をそそら

れるところがある」で始まる論述とは、逆接でつながれた食い違う議論でありながら、同じ段落の中に収められている。通常の文章作法で言えば、これは避けるべき破格な書き方だ。だがスミスはある効果を狙って、このような文章を構成したに違いない。つまり、文体論的に言えば、この文章は文学テキストとして〈有標〉なのであって、それなりの鑑賞を要求しているというわけである。

その効果とは、まさにこれらの異質な議論や主張たちが、未整理・未解決のままに雑然と一つの段落に収まっているという構成自体が物語っている。いわば、この段落は、多文化・多価値が均質化されることなく共存する共同体のあり方を、文章の形で比喩的に体現しているのである。その意味で『ホワイト・ティース』のこの部分においては、文章の伝達内容と文体とがみごとにマッチしていると言えよう。この箇所を読んでいるときに読者が感じる眩惑感、現在のロンドン、ウィルズデンという多民族社会の限界を歩くときに受けるだろう印象と、そう大きくは違わないのではないか——そう思わせるだけの猥雑性と豊饒な力とが、この文章にはある。均整のとれた文体、たとえばイアン・マキューアンやカズオ・イシグロらの文体では、たぶん表現しきれないと思われる迫力を持っている。

さらに、文学テキスト同士の関わりに目を向けてみても、面白い発見ができるかもしれない。ゼノンの矢のパラドックス、自分の過去という影を振り切ること、こう並べてみると、村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985年）もちょっと連想したくなる。村上の小説では、ゼノンのパラドックスは第27章、影を切り落とすエピソードは第6章に出現している。また、「世界の終り」というフレーズは、『ホワイト・ティース』のライトモチーフの一つで、イスラーム原理主義団体や動物愛護運動過激セクトやキリスト教原理主義一派のヒステリックな主張の表現語彙として反復出現する。1991年には英訳が出版された『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を、ゼイディー・スミスが読んでいたかどうか、筆者は寡聞にして知らない。だが、作家本人が意図しないテキスト間相互関連性の成立をも歓迎するという、文学鑑賞の姿勢によるならば、『ホワイト・ティース』の当該段落には、ここに日本の村上文学という異種の文化がこっそりもう一枚噛んでいる、とも読めることになる（村上文学の非和風性は、くだんの段落の文化的多様性をさらに増幅するだろう）。また別の思わぬ異文化の出会いと交流の場が、眼前に立ち上る可能性があるわけだ。

文学を文学として読むという、旧態依然・自閉的と見えるアプローチにも、取り柄はまだ残っている。異文化研究を進めるにも、旧来の学問領域の壁を取っ払って、全体として新しい統一方法論を模索すると同時に、「因襲的な」各領分の研究方法論が多数雑居する状態をあえて保つやり方も、顧みられていいのではないだろうか。

《追記》

この拙文が今回の論文としてとりあげられたことに関して、筆者より一言。この文章はあくまでも「研究余滴」として、本誌の埋め草にでもなってくれればという思いで書いたものである。これを「論文」だと強弁する意図など毛頭ない。本誌編者の編集方針により、筆者としてははなはだ身の縮む思いのする場所に置かれることになってしまった次第である。そのことをお断りしておきたい。